

研究ノート

英語学習経験と英語使用が日本人の英語力に及ぼす効果 — JGSS-2002¹ の分析を通して —

小 磯 かをる

(大阪商業大学)

1. はじめに

グローバル化時代のコミュニケーションツールとしての英語を使いこなせる力が以前にも増して求められており、英語能力はビジネスの世界においても、国際交流の世界においても、不可欠な要素となっている。一方、日本人は十分な英語力を保持していないという議論もなされている²。日本人の英語力については、TOEIC や TOEFL の受験生のデータや大都市で働く者を対象としたデータがあるのみで³日本人成人全体の英語力に関するデータは皆無に等しい。英語がコミュニケーションツールとして必要であるならば、TOEIC や TOEFL の受験生だけでなく、仕事や旅行などで実際に英語を使用する機会が多いと思われる成人全体の英語力も問題にすべきなのではなかろうか。

日本人の英語力を高める施策として、文部科学省は「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」(2002年)とそれに続く「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(2003年)を提言し、SELHiの制定や小学校への英語教育の導入の議論を進めている。このように学校教育の場でも英語教育の重要性が認識されている一方、「学校での英語の授業は、全く役に立たない」というような批判も多方面からなされている。学校英語に疑問を持つ者、学校英語だけでは不十分だと思ふ者、学校を卒業した後英語を学習したいと思ふ者の中には、英会話教室やカルチャーセンターに通ったり、テレビやラジオを活用しながら英語を学習している者も多い。学校以外の英語学習経験は性別、年代によって異なるのであろうか。また、学校での英語学習と学校外での英語学習とでは、どちらが英語力に及ぼす影響が強いのであろうか。本調査では英語学習経験を学校での学習経験と学校外の学習経験に区別して分析する。

また上記の「行動計画」では、学習者のモチベーションを高めるために、学習者が英語を使う機会を広げること、例えば、中学校においては留学生との交流の機会を増やすこと、また高校・大学においては留学を奨励することが盛り込まれている。実際、朝日新聞社のアンケート調査によれば、英会話学校等に通って英語を学習した経験者で、現在も英語を学習している者は19%に過ぎず、その理由として「英語を使う機会がないから」と言う回答が多く挙げられている⁴。このように現在英語を使用しているかどうかということと英語力は密接な関係があると思われるので現在の英語使用の有無についても分析に用いた。

2. 英語力

JGSS-2002では、英語の会話能力と読解能力を5段階で尋ねている。英語の会話能力に関しては、「あなたは、英語でどのくらい会話ができますか」という設問に対して、「日常生活や仕事の英会話が、十分できる」「日常生活や仕事の英会話は、なんとかできる程度」「道

をたずねたり、「レストランで注文できる程度」、「あいさつができる程度」、「ほとんど話せない」という5つの選択肢が、また読解力に関しては「あなたの英語の読解力は、どのくらいですか」という質問に対して、「英語の本や新聞がスラスラ読める」「英語の本や新聞を、なんとか読める」「短い英語の文章なら読める」「簡単な英単語ならわかる」「ほとんど読めない」という5つの選択肢が与えられている。これらの選択肢を、「ほとんど話せない」「ほとんど読めない」=「0」から、「十分にできる」「スラスラ読める」=「4」までの数値に置き換えると、会話能力の平均値は1.59(男性:1.63、女性:1.55 $p<0.05$)、読解能力は1.81(男性:1.86、女性:1.78 $p<0.01$)であり男女とも読解能力の方が優れていると回答している。また、会話能力と読解力は強い相関があった($r=0.775$)。この2つの変数を基に「英語能力」という新しい変数を作成し、英語能力が低い者、つまり「ほとんど話せない」し「ほとんど読めない」者を「0」とし最も能力の高い者を「8」とした。その結果英語力の平均値は1.33(男性:1.39、女性:1.49 $p<0.01$)で最頻値は「0」であった。回答者の4割近くが「0」、つまり「ほとんど話せない」し「ほとんど書けない」と回答している。年代別、学歴別、居住地のサイズ別の英語力の平均値を表1に示す。

表1 英語力平均値

	男性 1367人	英語力	女性 1586人	英語力
〈年代〉				
20代	166人	1.99	176人	2.40
30代	186人	2.06	242人	2.03
40代	219人	1.76	282人	1.78
50代	327人	1.41	326人	1.29
60代	269人	1.17	286人	0.72
70以上	200人	0.80	274人	0.23
〈学歴〉				
初等教育	303人	0.36	418人	0.35
中等教育	581人	1.15	741人	1.14
高等教育	478人	2.73	418人	2.49
〈居住地規模〉				
13大都市	242人	1.98	290人	1.78
その他の市	790人	1.50	915人	1.35
町村	335人	1.10	381人	0.95

男女共に70歳以上の平均値は1にも満たない。70歳以上の男性の68.2%、女性の85.4%が「0」、ほとんど読めないし、ほとんど話せないと回答している。20代と40代を除いては、男性の方が英語力が高いが、英語力が一番高いのは、20代の女性である。20代の女性は英語力の中でも特に英会話力が高い⁵。

学歴に因る違いは明白であり、男女とも高学歴者の平均値が高い($p<0.01$)。ちなみに高学歴者を専攻分野別に調べると、人文科学や芸術専攻者の平均値が高く、家政・教育系専攻者の平均値は低い。居住地の規模については、13大都市、都市、町村と3つのサイズに分けているが、居住地の規模が大きくなるほど英語力が高くなっている($p<0.01$)。

3. 学校以外での英語学習経験

英語の学習経験については、「英語について、次のような学習・経験をしたことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください」と尋ねており、「英会話教室や文化教室」「学校・地域・職場などの英会話サークル」「テレビやラジオの英語教育番組やニュース」「英語教材を使って自分で学習」「社内研修(国内で実施)」が選択肢に含まれている⁶。

3.1 学校以外の学習経験者の割合

有効回答数(2953人)のうち過去に何らかの形で英語を学習したことがあると回答した者は25.4%(男性:24.6%、女性:26.0%)であった。図1は年代別学習経験の割合を示したものである。男女とも30代が最も高く(男性:38.2%、女性47.1%)、年代が上がるにしたがって減少している。50代までは女性の方が男性より学習経験者の割合が高く、60代以上は男性の方が高くなっている。

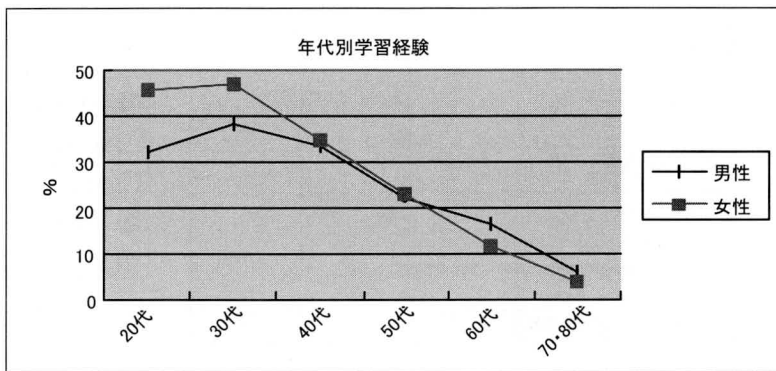


図1 年代別学習経験者の割合

3.2 学習経験内容

図2と図3は学習経験の内容を男女別、年代別に示したものである。「英語教材(テープ、ビデオ、CDなど)を使って自分で学習」を選択した者が多く(男性:11.8%、女性:10.0%)、反対に「社内研修」を選択した者は男女共数パーセントに過ぎない。男女に有意の差がある項目は「テレビやラジオの英語教育番組やニュース」(男性:9.5% < 女性:12.4% $p < 0.05$)「英会話学校や文化教室(カルチャーセンター)」(男性:6.1% < 女性:8.8% $p < 0.01$)、「社内研修(国内で実施)」(男性:2.5% > 女性:0.9% $p < 0.01$)である。

年代に関しては、すべての項目で有意差があり、20代・30代・40代の選択率が高かった。20代の男性は、英会話サークルや英会話学校での経験がある者が他の年代に比べて多く、30代・40代の男性は、テレビ・ラジオや自主教材で学習した者が多かった。仕事での英語の必要性は多くの者が認識しており、30代・40代のいわゆる働き盛りの男性は英語力を身につけようと思っているか、あるいはその必要に迫られているものの、英会話学校等に行く時間が取れず、テレビ・ラジオやテープなどを使って自学・自習しているケースが多いと思われる。一方、女性は20代、30代の者が学習経験が多く、英会話学校や英語サークルで学習、また自主教材で学習した者が多い。英会話教室やカルチャーセンターに通うのは20代の女性が多いというのは他の調査でも示されており⁷、津田(1995)が指摘するように若い日本人女性の西洋や西洋文化に対する強い憧れを反映しているのではないかと推察される⁸。

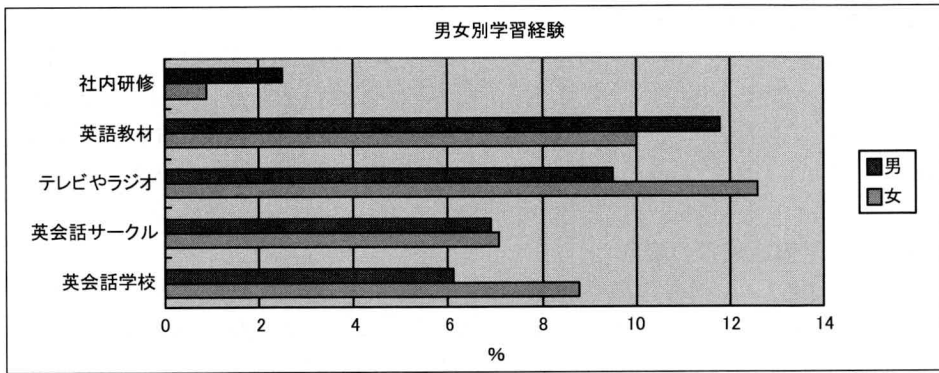


図2 男女別学習経験

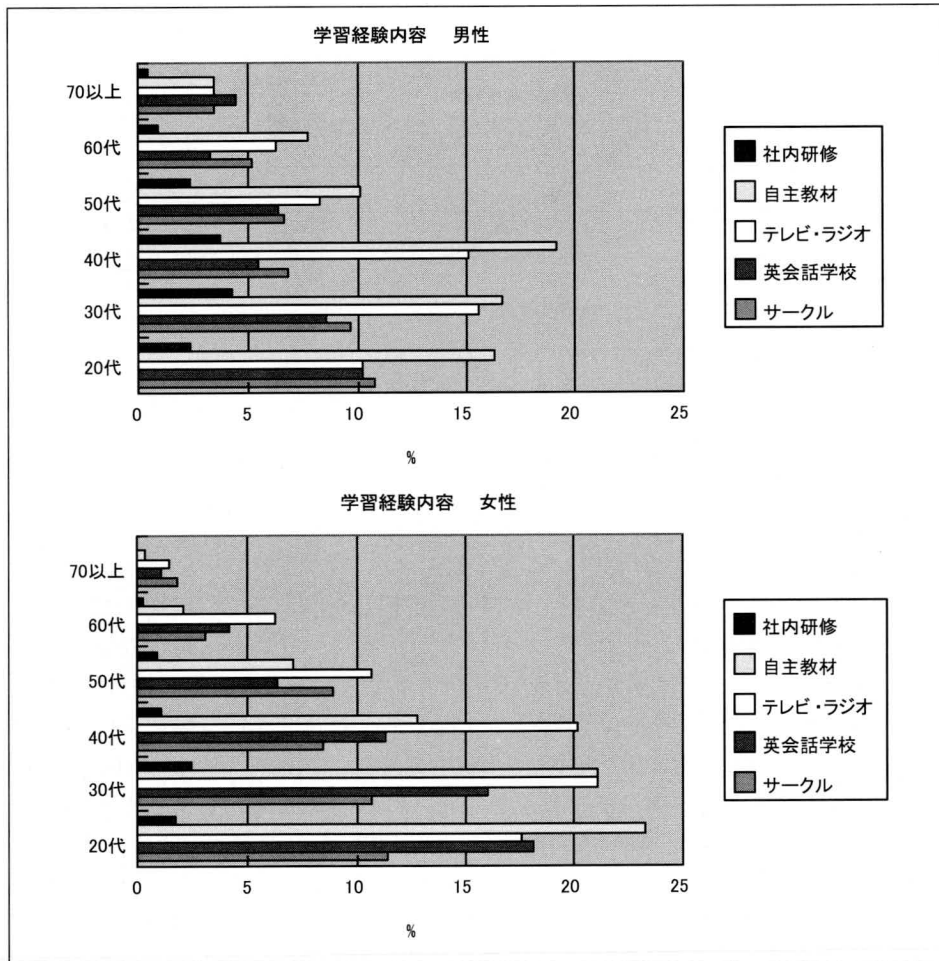


図3 年代別学習経験の内容

複数の学習を経験した者も35%ほどおり(男性:35.8%、女性:35.1%)、全ての項目を選択した者も数名いる。特に相関が強く見られたのは「英語教材(テープ、ビデオ、CDなど)を使って自分で学習」と「テレビやラジオの英語教育番組やニュースで学習」であり、「英語教材(テープ、ビデオ、CDなど)を使って自分で学習」した者(319人)の内138人(43.3%)が「テレビやラジオの英語教育番組やニュース」でも学習している。

4. 現在の英語使用

「あなたは、日常生活や仕事で英語を使いますか。(あてはまるものすべてに○をつけてください)」という設問に対して、「仕事で時々使う」「仕事でよく使う」「外国人の友人・知人との付き合いで使う」「家族とのコミュニケーションに使う」「趣味・娯楽・海外旅行などで使う」「ほとんど使う機会はない」「その他」という選択肢が与えられている。

4.1 英語使用者の割合

有効回答者数 2953 の内 13.4% が現在日常生活や仕事で英語を使用していると回答している。年代別にみると男性の場合、現在使用している者は 30 代の 20.4% が最も高く、20 代の 19.9%、40 歳代の 18.7% と続き、50 代以降は急減している。一方女性は 20 代が 23.3% と最も高く、その後年齢とともに減少している。女性が男性よりも使用率が高いのは 20 代だけである (図 4 参照)。

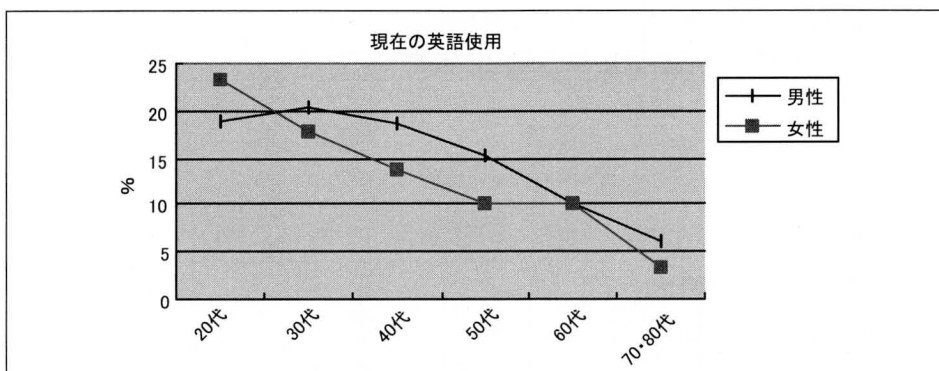


図4 年代別、男女別の現在の英語使用者の割合

4.2 英語使用目的

図5は英語の使用目的を男女別に示したものである(但し「その他」を除く)。「家族とのコミュニケーションに使う」は選択率が低かったので「外国人の友人・知人との付き合いで使う」と統合して、「友人・家族とのコミュニケーションに使う」という新しい変数を作成した。

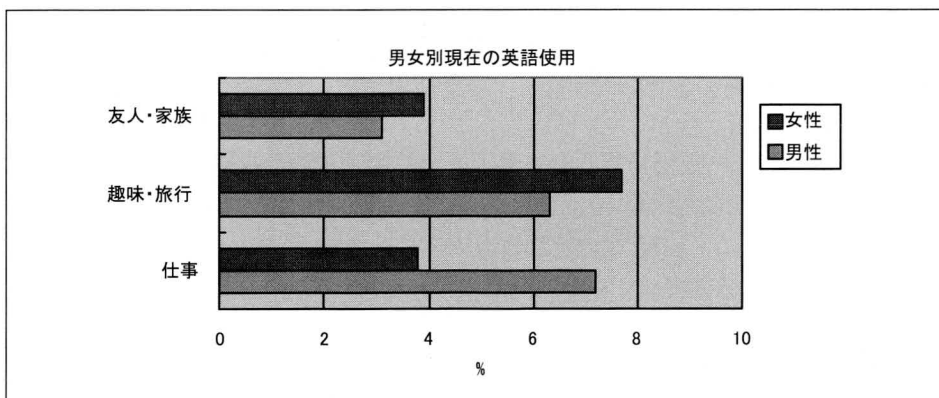


図5 英語の使用形態

男性は「仕事で使う」⁹者が7.2%で最も多く、女性は「趣味・娯楽・海外旅行などで使う」者が、7.7%で最も多い。就労者に限ると男性就労者の9.0%、女性就労者の7.1%が「仕事で使う」と回答している。「友人・家族とのコミュニケーションに使う」以外の項目では男女間に有意な差が見られた ($p<0.01$)。

次に、使用目的が年代によってどのように異なるのか調査した(図6)。

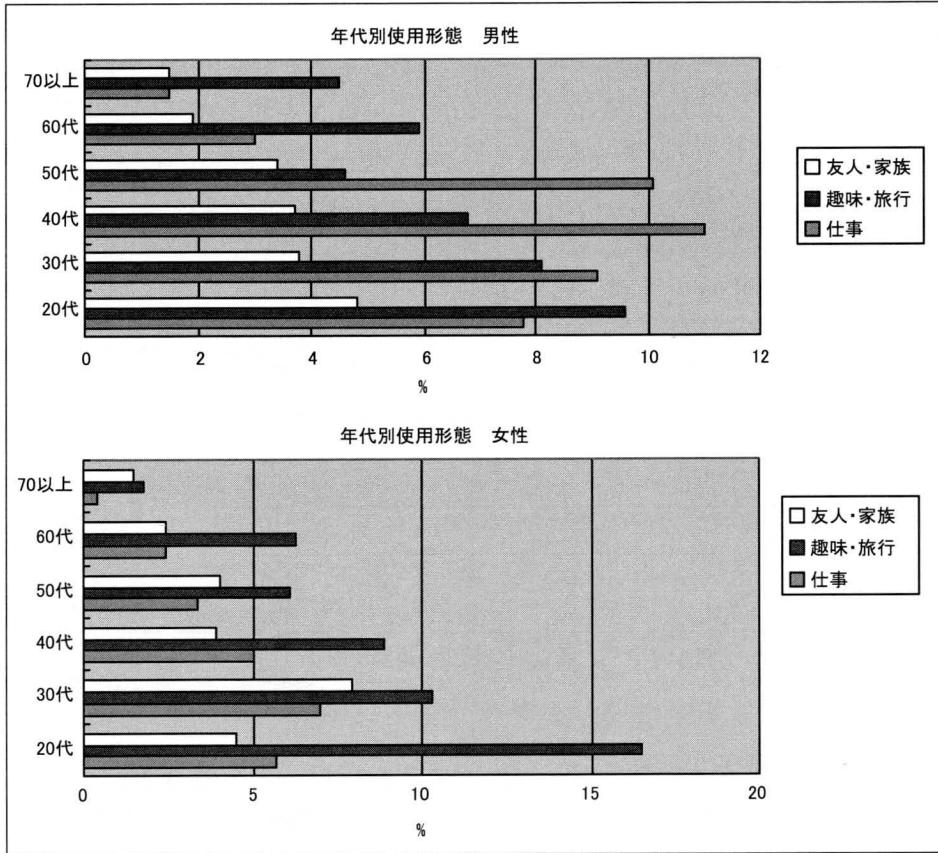


図6 年代別使用形態

年代別に見ると、男性の場合、20代は「趣味・旅行等」で使用している者が多く、30代から50代のいわゆる働き盛りの男性は「仕事で使用する」者が多い。中でも40代の男性は11.0%が仕事で使用する」と回答している。リクルートワークス研究所の調査でも30代、40代が仕事上英語力が特に求められているとしている¹⁰。女性の場合、全ての年代で「趣味・旅行」で使用している者が多く、特に20代の女性は、16.5%が「趣味・旅行」で使用していると回答している¹¹。30代の女性は友人・家族とのコミュニケーションで英語を使っている者、仕事で英語を使っている者が他の年代に比べて多い¹²。

5. 英語力の規定要因

学歴、学校以外での英語学習、及び現在の英語使用が英語力にどのように影響を及ぼすかを分析する。ただし、戦時中は、英語教育が実施されなかったこと、また、70歳以上の者は英語力が「0」と回答した者が8割近くおり(78.3%)、「0」から「8」までのスケールの

英語力を測る分析には適当でないと思われることから、分析には戦後学校で英語教育を受けた者、つまり、昭和 22 年以降新制中学で教育を受けた者を対象とし、昭和 8 年以前に生まれた者 (543 人) は分析から除外した。その結果分析対象者は 2410 人になった。

従属変数に英語力を、独立変数に年齢、教育年数、英語学習経験、現在の英語使用の変数を投入し回帰分析を行った。

モデル 1 は年代、教育年数、学習経験の有無 (学習経験あり = 「1」、経験なし = 「0」)、現在の使用の有無 (使用している = 「1」、使用していない = 「0」) を投入した結果、モデル 2 は学習経験と現在の使用をそれぞれの形態ごとの有無 (無し = 「0」、有り = 「1」) を投入した結果であり、表 2 はそれをまとめたものである。

モデル 1 を見ると、年齢は男性の回答者には影響を及ぼしていないが、女性の回答者には影響力がある。非標準化係数の B 値、標準化係数の β 値ともマイナスであるのは若い者ほど英語力が高いということである。表 1 では男性も 20 代、30 代は他の年代に比べて英語力が高かったが、教育年数、学習経験の有無、現在の英語使用をコントロールすると年齢の影響力が消えている。これは男性の場合、若いから英語力が高いのではなく、若い年代ほど高等教育を受けている者、英語の学習経験のある者、現在英語を使用している者が多いことが英語力の高さに影響したものと考えられる。一方、女性の場合それらの要因をコントロールしても年齢の影響が強い。

教育年数、学校外での英語の学習経験、現在の英語使用は男性および女性の英語力にも影響を及ぼしているが、その影響力は微妙に異なる。男性の場合、教育年数の影響が、学校以外の学習経験や現在英語を使っていることよりも強いものに対して、女性の場合はあまり大きな差が見受けられない。つまり、学校での英語学習 (教育年数) と学校以外の英語学習の影響力は男性の場合、学校での英語学習の影響の方が強いが、女性の場合はほとんど差がないということである。双方の影響力に関して、教育年数と学校以外の学習経験の有無の二つの変数のみで分析した結果も同様の結果を得た¹³。これはひとつには、女性は男性に比べて教育を受けた年数が少なく (男性: 12.4 年 女性: 11.6 年 $p < 0.001$)、女性で学習意欲がある者は学校以外で学習するケースが多いということにも因ると思われる。

表 2 回帰分析

	男性				女性			
	モデル 1		モデル 2		モデル 1		モデル 2	
	B	β	B	β	B	β	B	β
年齢	-0.00	-0.01	-0.00	-0.01	-0.01	-0.12 ***	-0.02	-0.12 ***
教育年数	0.27	0.40 ***	0.26	0.38 ***	0.21	0.30 ***	0.19	0.26 ***
経験有無	0.93	0.23 ***			0.86	0.26 ***		
サークル			0.51	0.07 ***			0.60	0.10 ***
英会話学校			0.59	0.08 ***			0.84	0.17 ***
テレビ・ラジオ			0.80	0.14 ***			0.47	0.11 ***
英語教材			0.58	0.11 ***			0.51	0.11 ***
社内研修			1.09	0.105 ***			0.49	0.03 ***
使用有無	1.45	0.31 ***			1.29	0.29 ***		
仕事			1.08	0.17 ***			0.80	0.11 ***
友人・家族			1.36	0.13 ***			0.87	0.11 ***
趣味・旅行			0.93	0.13 ***			0.81	0.15 ***
Adjusted R2 乗	0.47		0.50		0.48		0.52	

*** $p < 0.001$

次に、個別の学習形態と使用目的を投入したモデル2を見てみよう。学習形態に関しては、男性の場合はテレビ、ラジオや自主教材の影響力が強く、女性の場合は英会話学校の影響力が最も強い。表1で都市部に住んでいる者の方が町村部に住んでいる者よりも英語力が高いという結果を得たがこれは英会話教室やカルチャーセンターが都市部に集中していることが影響しているからであると思われる¹⁴。また「社内研修」は男性の場合、B値が他の学習形態と比べて高いのは、仕事で必要に迫られて学習する者はより真剣に学習する傾向があり、その結果英語力が伸びるということなのであろうか。使用目的に関しては、男性の場合は「仕事で使用する」の影響力が最も強く、女性の場合は「趣味・旅行で使用する」の影響力が最も強い。つまり、男性の場合、英語学習形態も、英語の使用目的も仕事に関わりがある項目の影響力が強いということである。一方、女性の場合は「英会話学校」と「趣味・旅行」の影響力が強いことから、英語を仕事で使うというより、自分の楽しみのため、また自己の教養を深めるために英語を学習したり、使用したりすることが英語力に結びついていると思われる。

6. おわりに

今回の調査では、男性は仕事で英語を使う者が、女性は趣味・旅行等で英語を使う者が英語力が高いという結果を得たが、今後は仕事で英語を使用する女性も増え、また団塊の世代の定年等によって男性も趣味・旅行で英語を使用する者も増えると予測されることから、次回の調査では異なる結果が生じるかもしれない。

学校以外での英語学習は、年代や性別により取り組み方はさまざまであり、いわゆる働き盛りの男性は学校等に通う時間がなく自主教材やテレビなどで学習している者が多く、若い女性は英会話学校等で学習する者が多く見られた。今回の調査項目には含まれていなかったが、今後はインターネットの普及により e-learningなどで学習する者が男女共増えると思われる。インターネット上での学習の利点は地理的な制約、時間的な制約がないことであり、大都市の居住者だけでなく、町村の居住者にも、また仕事等で時間の制約がある者に対しても学習の意欲さえあれば簡単に教材にアクセスし学習できることから、インターネットのさらなる普及に伴い、また年配の学習者にも使い易いようにインターフェイスを改善することにより、年齢差、地域差、性差を越えて英語を学習することが現在よりも容易になると思われ、その結果、日本人の英語力も高まると期待される。

[Acknowledgement]

The Japanese General Social Surveys (JGSS) are designed and carried out at the Institute of Regional Studies at Osaka University of Commerce in collaboration with the Institute of Social Science at the University of Tokyo under the direction of Ichiro TANIOKA, Michio NITTA, Hiroki SATO and Noriko IWAI with Project Manager, Minae OSAWA. The project is financially assisted by Gakujutsu Frontier Grant from the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology for 1999-2003 academic years, and the datasets are compiled and distributed by SSJ Data Archive, Information Center for Social Science Research on Japan, Institute of Social Science, the University of Tokyo.

注

- 1 本稿で使用したデータは、「日本版 General Social Survey」(JGSS)の第3回本調査であるJGSS-2002である。JGSS-2002は平成14年(2002)年に層化二段階無作為抽出法により全国13大都市を含む計18の市町村郡300地点から抽出された20歳から89歳までの男女5000人を対象に実施された。
- 2 TOEFLの2001-02年度版のデータ・サマリーによれば、コンピュータベースの日本人受験者の平均点は184点であり、他のアジア諸国と比べても際立って低い。
- 3 リクルート社のワークス研究所が2000年に首都・関西・東海圏の18歳から59歳の労働者の就業形態などを調べるために実施した「ワーキングパーソン調査」で労働者の英語使用について尋ねている。
- 4 朝日新聞、2003.9.13、『外国語できるほうがいいけれど』
- 5 リクルートワークスのワーキングパーソン2000(首都圏)によると、18歳から29歳までの女性正社員は日常会話以上の英会話能力があると回答した者が、同年齢の男性正社員よりも多い。
- 6 この質問項目に関して、「英会話教室や文化教室」「学校・地域・職場などの英会話サークル」「テレビやラジオの英語教育番組やニュース」「英語教材を使って自分で学習」「社内研修(国内で実施)」「海外旅行」「海外留学や海外研修」「海外での勤務や居住」「外国人の友人や知人との付き合い」という選択肢が与えられているが本調査では国内の学習経験に限定した。
- 7 山本思外里、「大人たちの学校」でカルチャーセンターの中核は50代を中心とする子連れ主婦層と20代のOL層であるとしている。
- 8 津田幸男、「英語支配の構造」では若い女性の英語に対する憧れが言及されている。
- 9 Q56では仕事での使用に関して「仕事で時々使う」と「仕事でよく使う」の項目に分けているが両者を統合して「仕事で使う」という変数を作成した。
- 10 ワーキングパーソン2000(首都圏)によると「仕事上英語力は求められていない」と回答した者は30歳～34歳までが最も低く、52.5%である。
- 11 国土交通省の2000年の観光白書によると、女性の場合には20歳代が265万人(女性全体の32.0%)と圧倒的に多く、次いで30歳代150万人(同18.1%)の順となっている。
- 12 民間のマーケティングシアター自主調査が2005年に全国の18歳以上の男女2313人にインターネットで行った調査によると、「外国人の友人との会話」で英語を使用する女性は18～24歳が最も多く、30歳代は低いという結果がでている。
- 13 男性の教育年数の β 値は、0.445、学習経験の β 値は0.307、R2乗=0.389、女性の教育年数の β 値は0.410、学習経験の β 値は0.349、R2乗=0.399であった。
- 14 平成14年の経済産業省による「特定サービス産業実態調査報告書」でも外国語会話室は人口集中地域に多く分布することが示されている。

参考文献

- 朝日新聞(2003.9.13)『外国語 できるほうがいいけれど』
- Graddol, D. (1997) *The Future of English*, British Council, (山岸勝榮訳(1999)『英語の未来』研究社)
- 白井泰弘(2004)『外国語学習に成功する人、しない人』岩波書店
- Daines, J., Daines, C. & Graham, B (2004) *Adult Learning Adult Teaching*. Welsh Academy Press
- 津田幸男(1995)『英語支配の構造』第三書館
- 鳥飼玖美子(2002)『TOEFL テスト TOEIC テストと日本人の英語力：資格主義から実力主義へ』講談社現代新書
- 松繁寿和(2002)「社会科学系大卒者の英語力と経済的地位」『教育社会科学研究第71集』大阪大学
- 山本思外里(2001)『大人たちの学校』中公新書
- マーケティングシアター「自主調査」<http://www.markth.jp/omni/7omni/0503omni06.htm>
- リクルートワークス「ワーキングパーソン2000」